

能力が全ての世界

名無しさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界には3つの力がある

『火』の力

『水』の力

『風』の力

3つの力を人類は1つずつ持っている

しかし力を持たない少年（エレン）

この物語は

少年（エレン）に隠された力と

少年（エレン）の家族の秘密の

物語である

目次

試練	86
悩み	48
俺の力	1

## 俺の力

この世界には 『火』 『水』 『風』

という3つの力が存在する

人類はそれぞれ1つずつその力を持ち

魔力を消費して 力を使う

そして 【異能力】というオリジナルの力を持つ

風の力を持つ者は風を固くする異能力や

水の力だが

火の異能力という 珍しい場合もある

さらに

火の力だが

まったく関係のない 異能力

という場合が最も多い

そして

火の力達は『火の国』

水の力達は『水の国』

風の力達は『風の国』

それぞれの国は その中で最も優れた者を『王』と名乗った

皆は王になるために必死に己を鍛えていた

人類は それからも平和を築いていた はずだった

南の国に生息していた

『悪魔族』

悪魔族は人類の天敵となり

幾度の戦を繰り広げた

だがしかし

悪魔族のなかでも

強大な力を持つ者が現れた

人類はそれを

『三大魔王』と呼んだ

三大魔王の出現によって人類は大きく後退した

しかし ある日突然

もう1つの力が現れた

その力は黄色い閃光を放ち

その力は 草原を一瞬で焼け野原にし

その力は 荒々しく雷獣のように動き周り

その力を持つ族は魔王と同じ力（オーラ）を持ち

さらに その黄色い閃光放つ力も持っていた

その族は魔王達を封印し 人類に平和が訪れた

だが一方で

その族が 今度人類を狙いにくるのでは

と 噂された

しかし その族達は

どこへ行つたのかはわからない

そして 悪魔族を憎む者達が広まり

次第には 人類を助けたその族をも憎んだ

その力を持つ族は今も どこかで日々を送っているのだそうだ

その族の名は

×××××  
族

『すまない…こんな父親で。どうか許してくれ…』ポオオオオ

『私もごめんなさい…こんな母親で…』ビュウウウ

『ねえ、お母さんと、お父さんは×の力以外にも風と火が使えたの!?!す  
ばー…』

『そうなんだがな、聞いてくれ。今から、我が一族に伝わる禁断魔法を  
使う』

『禁断魔法?』

『この魔法で母さんの風、父さんの火、この力をお前に託す。この力は  
大切な者を守りたい。そう思った時に解放される。それまで力と反  
動で異能力も一切使えない。そしてこの魔法使用后私達は死ぬ』

『これはね、これからあなたが物心付いてきた時に必要になるの…そ  
れと…この世界を救うのにも…あなたの力じゃなきゃできないの…』

『ごめんね、それまで周りの人になんて言われるかは分からないけど、  
どうか耐えて…』ポロポロ

『母さん？ 父さん？ どうしたの？ いきなり死ぬって…嘘だよね…  
母さん達に限ってそんな事…』 ポロポロ

『こんな親だが許してくれ…どうか許してくれ…』

エレン『ポロポロ』

レン…

レン…キテ…

ん？誰かが俺を…呼んでる？

誰だろう 起きるか

「エレン起きてー！」

エレン「11歳 「ん…ミカサ…？」 ムクツ

ミカサ「11歳 「よかった、エレンほらいくよ。」

エレン「うん（ここは…どこだ？）」

ミカサ「全くエレンは眠たいからって寝たら、もう帰る時間なんだから…せつかくのいい天気が草原で寝転んで寝るだけって…もつとお出かけがしたかったのにな…」 ブツブツ

エレン「なんか…すごく長い夢を見てたような…」

ミカサ「今日は仕方ないか…エレンいくよ…！エレン泣いてるの？」

エレン「何言ってるんだよミカサ…ツー」

エレン「あれ？ほんとだ、なんで泣いてるんだ？」ゴシゴシ

ミカサ「エレン、あんまり目こすつたら赤くなるよ。」

エレン「お前は俺の親かよ」ハハッ

ミカサ「いや、違う…（本当は恋人のような関係になりたい。なんて言えない。）」

――

――

――

ミカサ「ただいま、お母さん」

エレン「ただいま、おばさん」

ミカサ母「おかえり。エレン、ミカサ」

俺の親はいないらしい

小さい時に この家の前に

『エレン・イエーガー 4歳』というメモだけが置いてあつたそうだ。

周りの人は酷い親だとか言うけど

俺は何らかの目的 または そうしなくちやならない環境

俺はそう考えている

ミカサ母「ご飯できてるから、食べなさい」

エレミカ「はい」

エレン「…」モグモグ

言わなくちや…

ミカサ「…」モグモグ

もしかしたら 許可をくれるかもしれない

エレン「おばさん…」

ミカサ母「ん？どうしたのエレン？」

エレン「俺さ…来年、魔法学園に入りたい」

みんな「!?」ガタツ

ミカサ母「何言ってるのよエレン！」

ミカサ「そうだよエレン、エレンは世界中でも珍しい【アレ】なんだから…」

エレン「でも、俺は…魔法や能力の事について知りたいんだ」

※  
力の事を能力とも言います

エレン「いつも、ミカサに頼っていたらいけない。自分がミカサを守れるように、魔法学園に行きたいんだ」

ミカサ母「…そう…昔お父さんが言っていたわ『子どもの好奇心と夢は誰にも止められない。』まるで、このために言ってたみたいだね…」

ミカサ母「…エレン、いいよ行ってきて」

エレン「本当に!?ありがとうございます!おばさん!」

ミカサ「エレンが行くなら、私もいきたい」

エレン「ミカサ怪我しちゃうぞ!?!」

ミカサ「それに…エレンに守られてみたい／＼」

ミカサ母「おっ、ミカサ言うじゃない」ニヤニヤ

ミカサ「／＼」

エレン「ミカサ…そうか、だよな！ミカサはずっと俺が守ってやるよ！」↑鈍感

みんな「！」

ミカサ母「今日はもうお風呂に入って寝なさい」

エレミカ「はい」

あれから1年後

-----

-----

-----

-----

「レン…オキ…」

ミカサ「エレン起きて！」

エレン「ん…はっ！何時だ!?（なんかこんな事前にも…）」

ミカサ「遅刻だよ。早くしないと、中央区まで遠いんだから」

※

エレン達は風の国に住んでいます。

風の国は北、火の国は西、水の国が東ですちなみに南は昔の古城だそうです。そして、東西南北の真ん中の場所が中央区です

――

――

――

エレン「着いた…」

ミカサ「エレン、早くクラス表見に行こうよ」

エレン「おつ、ミカサと同じか」

ミカサ「うん（やったー！エレンと同じだ！）」

1組

エレン・イエーガー

ミカサ・アツカーマン

ライナー・ブラウン

クリス~~タ~~・レンズ

ユミル~~××~~

ジャン~~×~~キルシュタイン

コニー・スプリンガー

アルミン・アルレルト

モブ共

2組

サシヤ・ブラウス

アニ・レオンハート

ベルトルト・フリーバー

ミーナ・カロライナ

マルコ・ボット

モブ共

ー  
ー  
ー

――

――

エレン「……ゴクリ」

ミカサ「……」

ガラツ

「おっ、少し遅かったな」

「最後の人達だね！私はクリスタ・レンズ、よろしくね！」

「俺はライナー・ブラウンだ、よろしく」

「おいクリスタ」ガシツ

クリスタ「うわっ、ユミルも名前を言って、それと、急に掴まれるとびっくりするからね！」プンスカ

ライユミ「結婚しよへしてくれ」

ユミル「チツ…ユミルだ」

エレン「おう、よろしく！それと俺はエレン・イエーガーだ」

ミカサ「えつと…ミカサ・アツカーマン…です」

エレン「悪い、ミカサは初めての人だと、こんな感じなんだよ」

クリスタ「ううん！大丈夫！仕方ないもんね！」ニコツ

ミカサ「！…うん、ありがとう」ニコツ

クリスタ「そうそう、スマイル、スマイル！ミカサは笑うと可愛いね」

ミカサ「えっ…嬉しい／＼」

ユミル「てめえ！クリスタに何してんだ！」

ミカサ「！」ビクッ

エレン「おい、喧嘩か？あまり良くなi「うるせえ！」ゲシッ

エレン「痛つてえ！」

クリスタ「だ、大丈夫エレン!?ユミルもダメだよ！」

ユミル「チツ…」

ミカサ「ど、どうしよう…」オドオド

ガラッ

「はいはい、席についてー」

ガタガタッ

「はい、私はこのクラスを担当する、ペトラ・ラルです。」

ビ、ビジンダ ヤバイナ

ペトラ「はい、みんなも知ってると思うけど、この魔法学園では3年間、過ごしてもらいます。卒業後は皆さんには『魔法騎士』か、成績の良い人は、『魔法防衛団』になつてもらいます。それでは3年間よろしくね！」

パチパチパチパチ

※

魔法騎士の階級があり、5級騎士〜1級騎士まであります。魔法防衛団は王政の護衛などを行う団です。

ペトラ「じゃあ、まずは自己紹介から」

ペトラ「右の席の子からね」

「あつ、はい。えっと…アルミン・アルレルトです！よろしくお願ひします！」

パチパチパチパチ

ミカサ「あつ…えっと…み、ミカサ・アツカーマンです。…よろしくお願ひします」

パチパチパチパチ

「ジャン・キルシュタインだ。よろしく」

パチパチパチパチ

ライナー「ライナー・ブラウンだ。よろしく！」

パチパチパチパチ

クリスタ「く、クリスタ・レンズです！よろしくお願ひします！」

パチパチパチパチ

~~~~~

「コニー・スプリンガーだ！よろしく！」

パチパチパチパチ

エレン「エレン・イエーガーだ、よろしく」

パチパチパチパチ

ユミル「…ユミルだ」

ペトラ「うん。大体終わったかな。次は校長先生のお話なので、広場に集合！」

ー移動中ー

「えー、私がこの学園の校長のエルヴィン・スミスだ」

エルヴィン「この学園では、魔法騎士と同じ、【害虫退治】 【魔物の討伐】などの依頼。【市民の安全確保】などの事を実際に行う」

エルヴィン「当然、毎年死者もでる。がしかし、今期は優秀だと私は信じている。」

エルヴィン「3年後には、魔法騎士になれる。また、成績のよかつた者は王政の護衛などを行う、魔法防衛団に入れる。」

パチパチパチパチ

――

――

――

ペトラ「はい、じゃあ早速なんだけど、少しだけ授業をしたいと思  
います。」

エエエー ウソダロ

ペトラ「大丈夫、魔力と能力と異能力をみるだけだから」

※

魔力は最初から量は決まっていますが、能力と異能力を鍛えれば、  
自然に増えます。

~~~~~

ペトラ「次、エレン君」

エレン「……」

ペトラ「ん？、エレン君どうしたの？」

エレン「先生……俺は

能力と異能力が使えない……というか無いんだ」

みんな（ミカサを除く）「!？」

ペトラ「そ、そう……（魔力しかない子なんて、初めて見たわ……）」

――

――

]

エレン「ここが俺の部屋か」

※

エレン達は寮生活です。

ガチャ

「おっ、どうやら最後の人が来たようだ」

エレン「お前は…確か、ライナーだよな」

ライナー「ああ、そうだ。よろしくなエレン」

「僕もいるよ！」ヒョッコッ

エレン「えっと…アルミンだっけか？」

アルミン「うん、そうだよ！よろしくねエレン」

「俺もいるぜ」

エレン「コニーだよな」

コニー「おう！」

ライナー「もう少ししたら、飯だ食堂に行くぞ」

みんな「おう！へうん」

「取りに行ってます」

エレン「おつ、ミカサこっち来いよ」

ミカサ「うん」トコトコ

ライナー「おつ、なんだエレン、彼女か？」ニヤ

ミカサ「／＼／＼」

エレン「ん？違うぞ、家族だ」

ミカサ「∴」シユン←

アルミン「(エレン少しは気づいてあげなよ)」

ライナー「それよりお前はミカサだよな」

ミカサ「う、うん」

ライナー「(クリスタも可愛いが、ミカサも中々だな∴)」ニヤニヤ

エレン「ライナーどうした？ニヤニヤ」おつと、誰かと思えば、無能力者のエレン君じゃないか」ニヤニヤ

エレン「誰だよお前∴」

エツ、アイツムノウリヨクシヤナノ？ ナンデキタンダヨ

「俺はジャンだよジャ・ン」

エレン「…」イライラ

アルミン「ふ、二人とも少し落ち着こうよ！」

ジャン「チツ…」

エレン「…」

ミカサ「え、エレン…大丈夫？」

エレン「ああ…」

ライナー「まあ、あれだ。気にするな」

エレン「ああ…」

やっぱり 無能力者だと

みんなから からかわれるのか

く一ヶ月後く

あれから 俺は

ライナーやミカサ達は違うが

よくからかわれる

特にユミルとジャンだ

エレン「…イタダキマス」ボソッ

ジャン「おいお前まだ【ここに】いるのかよ」ハッ

ユミル「まったくだな」ヘラヘラ

クリスタ「ちよつとユミル！」

ユミル「おークリスマス〜」ガバツ

クリスタ「やめてよ！ユミル！」

ユミル「チツ…」

ジャン「おいお前、聞いてんのか!?!」

エレン「…」パクパク

ジャン「チツ…！無視すんじやねえ！」ブンツ  
※  
ブンツ∥殴るなどです。ガシツ∥掴む

バツ

「つ…」ドテツ

みんな「!?!」

ジャン「み、ミカサ…(やべえ、どうしようミカサを殴っちゃまった。)」

ガタツ

みんな「!」

エレン「おいテメエ、なにミカサ殴ってんだよ…」ギロツ

ジャン「う、うるせえ!こいつが勝手に庇ったんだよ!お前みたいな無能力者のためになあ!」

エレン「ぶぎけやがって…俺を殴るのはいいが、ミカサに手を出すやつはぜってえ許さねえ…」

ジャン「(こいつ…無能力者のくせに…舐めた態度取りやがって…ぜってえ潰す)」

ジャン「おi「おい、ジャン俺と勝負しろ」

みんな「!」

ジャン「ああ、いいぜ！お前みたいな無能力者に俺が負けるわけがねえ！」

エレン「俺が負けたら、俺は死んでやる。ただしお前が負けたら

二度とミカサと関わるな」ギロツ

ジャン「！」ゾワッ

ミカサ「う…エレンダメ…」

エレン「大丈夫、絶対負けないから」ニコッ

ミカサ「！…うん」

ヨ  
オイオイジャントムノウリヨクシヤガタタカウラシイゼ マジカ

ー広場ー

ジャン「やるぞ」コキッ

エレン「殺す気でこいよ…な！」ダッ

※  
ダッ||走る ピタッ||止まる ドガッ、バキッ、メキッ||攻撃  
をくろう

ジャン「フッ」ズバツ↑水の切る音

エレン「グハッ…」ポタポタ↑血

ミカサ「！エレン！」ダッ

エレン「来るなっ！」

みんな「！」

エレン「こんなやつ、余裕だ」ニカッ

ジャン「舐めやがって！」ズバ　ズバ　ズバ　ズバツ！

エレン「っ…」ポタポタ

アルミン「確かジャンの異能力は、『硬度変化』だったけ…ジャンは水の能力者だから…水の硬さを変えて、軟化、硬化、両方が可能になる相手ごわいな…」

ジャン「オラオラオラア！」ズバズバツ

エレン「クツ…」ポタポタ

ジャン「オラア！さっきの態度はどこいった！」ズバ　ズバ　ズバ　ズバツ

エレン「っ…」ポタポタ

ジャン「はっ！所詮無能力者には何もできないんだよ！」ズバツ！

エレン「グハッ！」ポタポタ

ジャン「いくぜっ！【奥義】『水龍斬』！」ズババババツバーン！！

エレン「グハッ…！」ビチャビチャ↑血

ジャン「チツ…まだ耐えるのか」

エレン「へっ…余裕だぜ…」ポタポタ

ジャン「ふざけやがって！舐めんなよゴラア！」ピシユン！

エレン「！（水を硬くしてそれを、直線に撃つ事もできるのか…確かに水の能力者は水を魔力次第だが、自在に操る事ができたな…）」

ジャン「さっさと死ねえ！」ザザザザザザン

エレン「うぐっ…」ガクツ↑片膝を地面につく

ジャン「まだ耐えるのかよ…チツ」ザザザザザザン

エレン「チツ…」ガクツ↑片手地面につく

ミカサ「エレン…もういいよ、ごめんなさい。だから、これ以上…  
傷つかないで」ポロポロ

ライナー「そうだエレン！もういい、これ以上傷ついたらミカサが  
悲しむぞ！」ツ―

クリスタ「そうだよ！」ポロポロ

エレン「ははっ…そうだよな…でも…俺は、ミカサを守るって決めたんだ。けど…守れなかった…だから…これだけはやらさしてくれ…」ポタポタ

ミカサ「うう…エレン」ポロポロ

ライナー「クツ…」

―――エレンとミカサがまだ小さい時―――

ミカサ幼「くっ…」

「君、中々いい顔してるねえ。どうだい？家にくるかい？」

ミカサ「だ、誰が行くの！」プルプル

「残念だなーじゃあもう、強引に行くしかないなー」

ミカサ「っ…（どうしよう…エレンとはぐれたら、おじさんから  
まれた…）」

おじさん「さあ、一緒に行こu」何やってんだよ！」「ドカッ

エレン幼「おいおっさん！ミカサに何やってんだよ！」

ミカサ「エレン…」

おじさん「痛たいねえ、君、何をしたか分かってるかなあ？」

エレン「ミカサに何したか聞いてるだろ！」ブンッ

おじさん「黙れ！この、クソガキが」ブンツ

エレン「グハツ…！」ズザアアア

ミカサ「エレン！」

エレン「うぐっ…ミカサ…大…丈夫だ…」

おじさん「舐めやがって！」ブンツ

エレン「うぐっ…まだだ！」ブンツ

ミカサ「(今エレンが私を守るために、戦っているのに、私は…何もできないなんて…どうしたら…)」

エレン「グハツ…！」ズザアアア

おじさん「ハアハア…ガキが…調子にノリやがって」

エレン「ミカサには…指一本触れるな!!」ブンツ

おじさん「チツ…これくらいにしておいてやる…（痛いじゃねえか…このガキ…）」ヨロヨロ

「おい…そこで何をやっている！」

おじさん「クソっ、魔法騎士に見つかった！」ダツ

魔法騎士「待てえ！」ダツ

エレン「行ったのか…」ポロポロ

ミカサ「エレン！」ダツ

エレン「ミカサ…大丈夫か？」

ミカサ「どうして…私のためにこんな無茶するの…」ポロポロ

エレン「いいじゃん別に、守りたい人がピンチだったんだから」

ミカサ「エレン…」ポロポロ

エレン「ミカサ…約束だぞ?」

ミカサ「約束?」

エレン「ああ、ミカサ…これからもお前を守るっていう約束。ほら指切り」

ミカサ「…うん…」ポロポロ

エレン「さあ、帰るか!」

ミカサ「うん!」

—————エレンとミカサが小さい時のお話終了—————

エレン「こいよ、ジャン!」

アルミン「(エレンはあんなにもボロボロになってもまだ戦うなんて…僕なんかじゃ…できない…)」ギユツ

※

ギユツ⇨抱きしめる、手を握るなど

ジャン「いいのかエレン？お前が死ぬと、ミカサ守れねえぜ？まあ、死んでもらうけどな！」ダッ

ミカサ「エレン！」ポロポロ

こんな所で…

こんな所で…

死んでたまるか！

バチバチツ!

ドカーン!

みんな「」

ミカサ「(エレンが…死ぬはずなんて…ない…)」ポロポロ

モクモク↑煙

みんな「!」

ジャン「俺の攻撃が!」

アルミン「エレンのあの力…まさか

雷の力…」

アルミン「嘘だろ…エレンが…そんな…あの族は200年前に悪魔族との戦いで、大半が死に、数人しか残らなかったはず…今だったら確実に途絶えてるはずだ…」

エレン「ミカサは…俺が守る！」ボオオオオオ ビユウウウ

みんな「!!」



ジャン「」

エルヴイン「一体何があつても!?

エレン バチバチツ!

エルヴイン「エレン…君は…」

ああ 俺勝つたんだ

でも もう 意識が もたない

エレン「」バタツ

みんな「!」

――――

――

」

ん？ここは？

エレン「…」パチツ

エルヴィン「起きたかいエレン君」

エレン「…」

エルヴィン「…」

牢屋だ」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d.

## 悩み

エレン「ろ、牢屋…!？」

エルヴィン「ああ、そうだ」

エレン「な、なんで…俺が…俺、なんか悪い事しました!？」

エルヴィン「君自身は何の問題も無い。ただ君のその能力が問題なんだ」

エレン「俺の…能力…」

エルヴィン「私もこんな事、あんまりしたくないんだけどね。君がまさか、あの

【イエーガー族】だったなんて」

エルヴィン「イエーガーっていう所で怪しかったんだがな、まさか本当とはな。」

エルヴィン「イエーガー族。それは、200年前に突如現れた悪魔族の力と誰も持たない、雷の力を持つ族。彼らは悪魔族の暴走を止め、魔王を封印したと聞いたがな」

エルヴィン「ただしその代償にイエーガー族のほとんどが死んだらしいがな」

エレン「あ、あの…」

エルヴィン「なんだね」

エレン「さつきから、イエーガー族とか、なんですか、それ」

エルヴィン「まあ、今は混乱しているのだと思うが、4日後君の事についての審判を行う」

エルヴィン「…あんまり暴れられると困るからな…」

エレン「っ…」

なんなんだよ

いきなり なんなんだよ

俺が何をしたって言うんだよ

まだ 気持ちの整理ができねえ

俺は

どうしたらいいんだ

エレン「ハァー…」ジャラツ

エレン「!?」

エレン「手錠が付けられてる！にしても、これだけ嚴重にするんだったら、監視係つけろよ…」キョロキョロ

エレン「おっと、監視があつた」

クリスタル ジイー

エレン「きつと、あのクリスタルが監視しているんだろう。チツ…」

エレン「(寝よう)」「ゴロツ

―3日後―

エレン「ハァー…(明日だったけ…俺、どうなるんだろうな)」

コツ コツ コツ

エレン「(もしかして、死ぬのかなあ)」

コツ コツ コツ

エレン「(できれば、最後にライナーやアルミン、クリスタにミカサとかに会いたかったな…)」

コツ コツ ピタ

「おへ」

エレン「!?!」 ジャラッ

「俺は魔法騎士、特別班兵士長の

「リヴァイ」だ」

エレン「…（なんかよくわからないけど、結構偉い人だよな…多分…小さいけど）」

リヴァイ「おい、お前今俺の事小さいと思っただろ。殺されてえのか？」ギロツ　ゴゴゴゴゴゴ

エレン「ひいつ！（なんで分かったんだよ！）」ジャラツ

リヴァイ「まあいい、それよりお前は今、なんでここに居るのか分かるよな」

エレン「まだよくわかりませんが、とりあえず俺の力が問題という事は知ってます」

リヴァイ「ああ、その事についてなんだが、俺らの班にこい」

エレン「えつと…」

リヴァイ「ちなみに、拒否権はない」

エレン「…はい…」

リヴァイ「なら、審判の時に前が助かるようにしないとな」

エレン「あ、ありがとうございます。」

リヴァイ「じゃあ、明日クソメガネが審判の所まで案内するからな」

エレン「え？…あ、はい（クソメガネ？）」

――

――

――

エレン「(今日だったけ、審判。俺…死ぬのかな…いや、きつとり  
ヴァイさんが…多分…)」

コツ コツ

エレン「!」ジャラッ

「やあ、君がエレン君かい?」

エレン「え…あ、はい」

「おっと、自己紹介が先だね。僕はハンジ、ハンジ・ゾエ。これでも  
一応、魔法騎士団の分隊長なんだよ?」

エレン「そ、そうなんですか! (この人が!?すごいな…)」ジャラッ

ハンジ「さあ、早くしないとね。今から審判だよ」

エレン「はい」

↳牢屋から出てすぐの廊下↳

ハンジ「さあ、歩きながら話でもしようか」コツ コツ

エレン「あ、あの…」

ハンジ「ん？」

エレン「この人は…？」

「…」スンスン↑エレンのにおいを嗅いでいる

ハンジ「ああ、彼はミケ、ミケ・ザカリアスだよ。私と同じで、魔法騎士団の分隊長だよ」

エレン「そ、そうなんですか…」

ハンジ「それに、ミケは初対面の人のにおいを嗅いで…」

ミケ「…」スンスン…フツ

ハンジ「鼻で笑う」ふ

エレン「なんですかそれ：（なんだよこの人！魔法騎士団やバイ  
よお！）」

ハンジ「おっと、もうちょっとお話したかったけど、どうやら着い  
たみたい」

エレン「…」ゴクリ

ハンジ「あとは頑張つてね。エレン」ボソツ

ガチャツ キー

エレン「（みんなからの視線が、まるで化け物を見る目だ…）」

ザワザワ ザワザワ

「静粛にしたまえ」

シーン

「ではエレン君だったかな？そこに座りなさい」

エレン「はい」

「…」スタスタ　ガチャツ

エレン「(椅子に座った状態で、手を縛られた…)」

「えー、私が審判する、ダリスだ。早速だが、君は雷の力が使えるのかね？」

エレン「あ、えっと…使えるらしいです」

ダリス「君はこの事を知っていたのかね？」

エレン「自分は昔から無能力者だったので、知りませんでした」

ダリス「…ふむ、やはり報告書通りだ。君の【今】の母にも聞いたが、どうやら使えなかったらしいな」

エレン「!? (母さんに!?)」

ダリス「まあ、このぐらいにしておいて、魔法騎士団の意見と魔法防衛団の意見を聞こうか。ではまず魔法防衛団から」

「はい。魔法防衛団23代目団長 ナイル・ドークが言います。我々魔法防衛団はエレン・イエーガーに雷の実験を行ったあと、解剖して人類に情報を残してから、死んでもらいたいと思っています」

ダリス「では、魔法騎士団の意見を」

「魔法騎士団25代目団長 キース・シャードイスが言う。魔法騎士団にエレン・イエーガーを正式に入団させ、戦力として扱う」

ダリス「ん？もういいのか」

ナイル「ちよつと待つてください！」

ナイル「エレンが暴走したらどうするのですか!?!」

ソウダソウダ タシカニナ

ダリス「有無、確かに」

キース「その事については特別班にエレンを置くため、たとえ暴走したとしても、特別班の兵士長に任せる」

ナイル「雷の力を持つ者は悪魔族の力も持つんですよ!?!生かしておけるか!」

ソウダソウダ フザケルナ

ダリス「静粛にしたま e ガツシャーン!!

ナンダナンダ!?

ナイル「貴様!何者だ!?!」

「俺か?俺はな

ケニーだ」

みんな（エレン以外）「!？」

ケニー「そんじや、エレンもらって行くわ」パキツ↑エレンの椅子に付いてる色んなやつを壊した音

エレン「は?。」

↳審判所から遠く離れた場所↳

ケニー「よつと」スタツ

エレン「つていうかなんで一瞬なんだよ…」

ケニー「それは俺の仲間へすげえ道具作る奴に貰った。ちなみに  
使い捨て」

エレン「なにそれ…はっ！そんな事よりも何処だよここ!？」

ケニー「まあまあ、落ち着け」

エレン「落ち着いてられるk「落ち着け」ゴゴゴゴ

エレン「!…:はい…:(なんだよこいつ…:絶対ヤバイ奴だろ!)」

ケニー「よしっ、早速だがお前を強くするため、ちよつと強くなつ  
てもらおう」

ケニー「拒否権はない」キツパリ

エレン「」

ケニー「いや、俺だって正直やりたくないけど、上からの方針でさ」

エレン「よくわからないけど、元の場所に返してくれるか？」

ケニー「ああ、強くなつてからな」

エレン「大体俺はお前がどれだけ強いかわらなし」

ケニー「なら、見せてやるよ」ズバツ

ヒューーン ドツカッーン！↑山が崩れる音

エレン「」

ケニー「これでいいか？」

エレン「はい…(っ、強すぎるだろ…)」

ー同時刻ー

みんな「エレンが攫われた!？」ガタツ

アルミン「エレンが!? 審判中に!」

ミカサ「ど、どうしたら…」オロオロ

クリスタ「一体誰が…」

「攫った人はケニーと名乗ってたそうだよ」

ライナー「ケニー? 誰だそれ」

ミカサ「とにかくエレンは無事なのですか!」

「なんかリヴァイ兵士長が『あいつなら大丈夫だ…かなりウザイが…』って言ってた」

みんな「ありがとうございます!」

「うん、じゃあもう任務に戻るね」スタスタ

アルミン「にしてもエレンが…」

クリスタ「大丈夫かな…エレン…」

ミカサ「うう…エレン…」

ライナー「…」

―遠く離れた場所―

ケニー「じゃあ今日から始めるぜ」

エレン「分かった（なんだかよくわからないけど、コイツ確かに強い…でも一応魔法学園あるんだけど…）」

ケニー「じゃあまずはその力を完璧にコントロールしろ」

ケニー「こんな風にな」ボワツ

エレン「!?青い…」

ケニー「これは自分の魔力を体に纏う技だ。ちなみに能力によって色は変わる。俺は水だから【青】火は【赤】風は【緑】という風になっている」

エレン「それ、どういう意味があるんだ？」

ケニー「これは身体能力を著しく増加させる」

ケニー「だからこんな感じに」ビュンツ

エレン「！（10mぐらいの高さまで跳べるのか）」

ケニー「やってみろ」

エレン「コツとかは？」

ケニー「感じる…と、言いたいがコツはとうとうとな…気持ちの強さ…だな」

エレン「強さ？」

ケニー「ああ、目標や大切に思う気持ち。最悪、復讐だけだな」

エレン「俺の場合は…」

俺の場合…

ジャンをぶっ倒すとかかな？

いや、復讐になっちゃうな…

一時期最強になるとか言ってたな…

エレン「まだ…分からないや」

ケニー「そうか…：：～  
しいぜ」

エレン「そうなのか…：：：：：でも、俺は弱いからたたかえないな」

ケニー「何言ってるんだよ、火と風合わせて【熱風】とかやれよ」

エレン「なるほど…：：：：：よしっ、やるぞー！」

ケニー「あ、でも最初は魔力を纏うやつからな」

エレン 「マジかよ…」 ガーン

ケニー 「まあ、頑張れや」

↳2日後↳

エレン 「全っ然できねえー！」 グテー

ケニー 「あつ、言い忘れてた。まず、素の身体能力を強化してから  
だった…」

エレン 「最初にそれを言え！」

ケニー 「あーすまん」

エレン 「チツ…ちよつと走ってくる！」 タタタタ

↳数km離れた場所↳

エレン 「ハアハア…こんぐらい走ればいいか。帰ろ…」 スタスタ

ザッ

エレン「あ…」

「え…」

↳2日前↳

「どうしたんですか？いきなり呼んで」ガチャッ

「悪いねえ、いきなり呼んで」

「実はというと、風の国の近くにある、とある山に行つて悪魔退治をしてほしい」

「悪魔退治ですか？」

「ああ、そこで君達を呼んだ。詳しくはこの地図にかいてあるから」

「あ、はい」

「よろしくね」ガチャッ

「いきなり、悪魔退治って大丈夫かな…」

「だな、エレンが攫われてまだ全然日が経ってないのにな」

「とりあえず、みんな準備してから行こうか」

〜現在〜

「エレン！」ダッ

エレン「おっと、ようミカサ元気にしてたか。みんなもな」

アルミン「エレン：攫われたって聞いたけど、大丈夫？」

エレン「ああ、大丈夫だというか、逆に世話になってる」

クリスタ「よかったよ〜」ポロポロ

ライナー「全くだ」

エレン「とりあえず、どうしてここにいるんだ?」

クリスタ「エルヴィン校長に悪魔退治頼まれたからだよ」

エレン「で、その悪魔は?」

ミカサ「近くにいるはず…」ザッ

エレン「…」キョロキョロ

悪魔×50ぐらい

エレン「!」

悪魔　ダッ

ライナー「多すぎるだろ!?!」

アルミン「とりあえずみんな逃げて！」ダッ

みんな「分かった！」ダッ

エレン「ハアハア…また走るのかよ…というかはぐれたし」

「え、エレン？」

エレン「ん？クリスタか？」

クリスタ「エレンもはぐれたのかな…？」

エレン「ああ、一緒にみんなを探すか」

クリスタ「うん」

ポタ           ポタ

エレン「雨…か」

クリスタ「風邪ひいたらだめだし、どこか雨宿りできる所探そ？」

エレン「なら、あそことかは？」

洞窟 ポツーン

クリスタ「うん、行こっか」

ザー

エレン「かなり降ってきたな」ポタポタ

クリスタ「そうだね、それとびしょ濡れだね」ポタポタ

エレン「仕方ない…クリスタ、着火できそうな物あるか？」

クリスタ「えーつと…あつた！」ゴソゴソ

エレン「よしっ、じゃあかしてくれ」

クリスタ「うん」

エレン「よつと」ボワツ↑着火物が燃える

クリスタ「おおつ、エレンすごい…」

エレン「あとは、どんどん着火物がほしいから…近くにある木を取って火で乾かすか…」

クリスタ「分かった」

エレン「クリスタ、ちよつと火見せてくれ」

クリスタ「うん」

クリスタ「(エレン、元気そうでよかったな…)」

エレン「よしつ、クリスタ少しどいてくれ」

クリスタ「ん」スツ

エレン「ありがと、とりあえず乾かすか」ボオオ

クリスタ「エレン。聞いたかったんだけど、審判所で何があったの？」

エレン「実はだな……」

クリスタ「そつか……エレンはそのイエーガー族っていうのだったんだね。それでみんながエレンを捕まえたんだ……」

クリスタ「(エレンもそういう、家系とか族とかの問題があったんだね。私の場合は……」

く回想く

「あんななんか産むんじゃない！」ブンツ

「痛い！お母さん痛いよ……」

「うるさい！あんななんかの親じゃない！」ブンツ

――――



エレン「何か悩み事か？なら、俺に言えよな。いつでも助けるからな」

クリスタ「あ、ありがとう」

エレン「そういや、クリスタ。お前と最初会ったときに、変な事思ったんだけどさ」

クリスタ「ん？」

エレン「お前」

笑うのわざとつくってるだろ」

クリスタ「！」ギクツ

エレン「お前なんか隠してるだろ。俺に教えてくれないか？」カベ  
ヲドンツ

クリスタ「えつと…(どうしよう…エレンに言おうかな…でも嫌わ  
れたら…)」

エレン「クリスタ？ごめん、嫌だったか？」

クリスタ「えつと…嫌いにならないでね」

エレン「？」

クリスタ「まず、くくく」

クリスタ「というわけなの…（嫌われたかな…）」

エレン「つまりお前はレイス家っていう偉い所だけど、いらぬ子として捨てられて、クリスタって名前も偽名でほかの人に嫌われたくないから、いい事をしようとして、無理に笑ったりとかしてたのか」

クリスタ「う、うん…」

エレン「クリスタ！」ガシツ

クリスタ「！（隠してたから、怒られる！）」メヲトジル

エレン「お前も苦労してるんだな」ナデナデ

クリスタ「えっ…怒らないの？」

エレン「当たり前だろ？お前の事怒って何になるんだよ」

クリスタ「ごめん…」

エレン「なんで謝るんだよ。これからは無理にいい事しなくてもいいよ」

いかんだぜ？」ナデナデ

クリスタ「で、でも私は誰にも必要とされないから…いい事しないと、必要な人になれないよ…」

エレン「何言ってるだよ、ミカサやアルミン、ライナーだってお前の事必要としてるし、俺だってお前の事が必要だぞ？」ナデナデ

クリスタ「ホント？エレンは…私の事嫌いにならない？」

エレン「当たり前だ、ずっと好きでいてやるよ」ナデナデ

クリスタ「エレン…」ポロポロ

エレン「ん？」

クリスタ「うええーん！エレン！」ダキツク

エレン「すぐ泣く…」ナデナデ

〈10分後〉

クリスタ「ひつぐ…ぐすつ」ポロポロ

エレン「おっ泣き止んだか、今日はもう暗いし寝るぞ。それと」

クリスタ「？」

エレン「明日からは、本当のお前になれよ」ボソツ

クリスタ「うん」

―翌日―

エレン「ん…」ムクツ

クリスタ「ん…」ムクツ

エレン「おはよう、クリスタ」

クリスタ「エレン、言い忘れてたけど私

【ヒストリア】っていのの「

エレン「そうかじゃあヒストリア」

クリスタ「でも、クリスタでいいよ。前のいい子ちゃんのクリスタ

じゃないけどね」

エレン「よしっ、クリスタ、アルミン達と合流するぞ」

クリスタ「うん！」ギョツ

エレン「急にだきつくなよ」

クリスタ「どうして？」

エレン「は、恥ずかしいから／＼／」

エレン

私 エレンに言われて変わった

エレン ありがとう

そして

エレンに会って分かった事があるの

クリスタ「エレン……」

大好き」ボソツ

エレン「ん？なんか言ったか？」

クリスタ「なんでもないよ」ニコッ

エレン「おっ、今のはつくってないから可愛いな」

クリスタ「えへへー／／／」

エレン「よしっ、行くぞ〜」

クリスタ「おー！」

t o b e c o n t i n u e d .

## 試練

エレン「よしっ、アルミン達を探しに行くか！」

クリスタ「おー！」

――――

――

――

クリスタ「ねえねえ、エレン」

エレン「ん？どうしたクリスタ？」

クリスタ「あそこ」スツ

エレン「ん？」クルツ

悪魔 キョロキョロ

エレン「えええええ!!??」

クリスタ「シーっ、声が大きいい！」ボソッ

エレン「す、すまん」ボソッ

クリスタ「不意打ちしよっか」ボソッ

エレン「いいけど…怖い事言うな…」ボソッ

クリスタ「じゃあ…私の水とエレンの火で一斉にだよ」ボソッ

エレン「分かった」ボソッ

クリスタ「…」コクッ

エレン「…」ビシッ↑親指たてる

クリスタ「とうっ」ズビュン↑水を一点に集中させ、発射したとき  
の音

エレン「おらあッ！」ボワアア！↑手から火をだしている

悪魔 チーン

クリスタ「やった！討伐一体目だよ！」ピョンピョン

エレン「おいクリスタ！」

クリスタ「！」ビクッ

エレン「まだいるかもしれねえんだぞ」ボソッ

クリスタ「ごめんなさい…」シユン

エレン「また、後でな？」ナデナデ

クリスタ「！／／／」パアア

エレン「アルミン達と早く合流しないとな…」

クリスタ「そうだね…」

〜一方その頃〜

アルミン「ハアハア…つ、強すぎる…」ポタポタ↑血

ライナー「くっ…立てねえ…」グググ

ミカサ「チツ…数じゃ勝ってたのに…」ボロボロ

「弱いなあ、君達。エレンっていう子知らない？」

アルミン「誰が言うか…」

「あちやー、まあそりやそうか…」

「…じゃあもう…終わらせるね」シユン

ドツカーン！

エレクリ「!?」クルツ

エレン「何だ今の!？」

クリスタ「行ってみよう!」 タツ

エレン「ハアハア…何だ…これ…」

アルミン「くっ…エレン…クリスタ…気をつけて…」 ポタポタ↑血

ライナー「…エレン達か…すまねえ…やられた…」

クリスタ「アルミン!ライナー!大丈夫!？」 ダツ

エレン「クリスタ!ライナー達を頼む!」

クリスタ「エレンは!？」 ポワポワ↑回復中

エレン「俺はミカサを探しに行くっ!」

アルミン「エレン!…ミカサは…戦ってる…だから…頼む!」

エレン「ああ！任せとけ！」ダッ

クリスタ「エレン…」ポワポワ

ライナー「あいつならきつと大丈夫だ…」

クリスタ「よしっ、アルミンは怪我が軽いから治ったよ！」

アルミン「ありがとう…」

クリスタ「ライナー…大丈夫？」ポワポワ

ライナー「ああ、大丈夫だ…（女神…）」

—————

—————

]

エレン「ハアハア…！」タタタタ

エレン「ミカサ！大丈夫か!？」

ミカサ「エレン！気をつけて！」ボロボロ

「おやおや、いましたねえ…エレン君」

エレン「てめえか！ミカサをやったのは!？」

「ああ、この子ですね。でしたら、私ですねえ」

エレン「許さねえ…」

ミカサが やられてる

俺はまずどうすれば

そういえば…

ケニー「エレン」

エレン「ん？」

ケニー「お前の事、知って襲ってくるやつのために教えといてやる」

エレン「なんだよ…」

ケニー「まず、名前を聞け」

エレン「なんでだよ…」

ケニー「それはな、有名な殺し屋だったら、噂などで知ってるやつかもしれないからな。まず、それで名前を聞いて、異能力や特徴を知ってたら少しは楽だろ」

エレン「なるほど…」

-----  
だったよな！

という事は

エレン「一体…誰なんだよお前!？」

――

――

――

クリスタ「とりあえず、応急処置は終わったよ。ライナー」

ライナー「ああ、ありがとう」

クリスタ「一体何があったの？」

アルミン「僕が話すよ」

少し前

アルミン「エレン達どこいったんだらうね」スタスタ

ライナー「にしても、悪魔が多いな…」スタスタ

悪魔×25 チーン

ミカサ「大丈夫、倒せばいいだけでしょ」スタスタ

ザッ

みんな「!」

「チツ…厄介だな…」グッ

ライナー「お前…悪魔かよ!?!」

「おらアっ!」シュツ↑水が放出する音

ライナー「【硬化】!」シャキン

ドツカーン

ライナー「っ…」ボロボロ

アルミン「ライナー！」

ミカサ「チツ…【破壊】《ブレイク》！」ズドーン

「うおっと、あつぶつねえ」

巨石 ガラガラ↑崩れる音

アルミン「ミカサ！僕も戦うよ！」ビュウウ↑風の音

ライナー「くっ…俺もだ」ボワツ

「チツ…やだなあ、人数が不利じゃないか」

「まあいいけど」ゴゴゴゴ

みんな「!？」

大波 ゴゴゴゴ

ライナー「やべえ！【硬化】！」シャキン

アルミン「どうする…（風で身を包むしか…）」ビュオツ

ミカサ「【全破壊】《フルブレイク》！」ズドーン！

ザツバーン

ライナー「くっ…」ボロボロ

アルミン「うっ…（地面に叩きつけられた衝撃で、頭が…）」ポタポ  
タ

ミカサ「みんな！大丈夫!？」

「へえ、軽傷ですか…」

ミカサ「よくも…」ダッ

「中々ですね」シユン↑魔力を込めた水の玉

ミカサ「！（多すぎる！）【全破壊】《フルブレイク》！」ズドーン  
！

ミカサ「うつ…！」ズザアア

「すごいねえ…全部くらってないんだ」

「特別に僕の事、教えてあげるよ」

「僕は…」

く今く

アルミン「ごめん…頭打って記憶がおかしいや…」

クリスタ「大丈夫？」ナデナデ

アルミン「うん…（女神…）」

「……………」

――

」

「私は十二星座悪魔の一人。【蟹座】の『キャンサー』だ」

エレン「そうか…じゃあ焼きガニにしてやるよ！」ボワアア！

キャンサー「残念、僕は水なんだ。相性が悪かったね」ズバツ

エレン「ばーか、くらえっ『合体魔法』【炎の竜巻】〈ファイヤートルネード〉！」

キャンサー「何っ!?!」

ドツカーン！

モクモク

エレン「よしっ」

キャンサー「痛いなあゝ」ガラガラ

エレン「まじかよ!？」

キャンサー「まっ、そろそろ終わらせませすよ」ブワツ

エレン「チツ…」

もう…あれを使うしか…

でも あれは…1回しか使ったことがないし…

この技も初めてだ…

キャンサー「終わりですね。くらえ！」ズバツ

考えてる時間なんてない!

エレン「いくぞー!」

雷と風を合わせて…

エレン「【雷風】《サンダーストーム》！」バチバチバチ！！

ドツカーン！

キャンサー「くっ…」バタツ

エレン「よしっ」

タタタタタ

クリスタ「エレン！」ダキツク

みんな「!？」

エレン「うわつと…」ナデナデ

アルミン「えつと…ツツコミ所が多すぎるんだけど」

ライナー「それよりミカサを！」

クリスタ「あつ、分かった！」

ミカサ「うっ…」

エレン「大丈夫か？」

ミカサ「な、何とか」ボロボロ

アルミン「エレン、少しお話がある」

ライナー「エレン、ついでに俺もだ」

エレン「…分かった」スタスタ

クリスタ「ミカサ、大丈夫？」ポワポワ↑回復中

ミカサ「少し…良くなった…」

アルミン「エレン！あれはどういう事!？」

ライナー「そうだ！」

エレン「え、何が…」

アルミン「クリスタの事だよ！」

ライナー「いつの間に仲良くなったんだ!？」

エレン「お前らとはぐれたときから」

アルミン「どういう風に!？」

エレン「クリスタが悩んでそうな顔してたから、話を聞いて頭撫でたら、ああなった」

ライナー「羨ましいぞっ！」グスン

アルミン「全くエレン。君はねえ…（羨ましいだろうがコノヤロー！）」

エレン「えっ、いや、何か…ごめん…」

クリスタ「はいっ、終わったよ…」

ミカサ「ありがとうクリスタ」

ミカサ「ところで…さっきのは何？」

クリスタ「えっと…その…勢いでつい／＼／」

ミカサ「別に大丈夫だよ」

クリスタ「え？…ミカサはエレンの事好きじゃないの？」

ミカサ「好きだけど…どんな形になろうとエレンのそばに居れば  
いいって思ってる」

クリスタ「そっか…でも、エレンに言わないと伝わらないよ？だか  
らさ…」

ミカサ「…分かった…クリスタ」

クリスタ「ん？」

ミカサ「私、負けないから！」ニコッ

クリスタ「！うん！」ニコッ

シユン

みんな「！」

ケニー「見つけたぞ、エレン！」

エレン「あ…」

ケニー「まったく…上から怒られるのは俺なんだよ！」ガシッ

シユン

アルミン「え、いやちよつと！」

ミカサ「エレン達の魔力を感じない」

ライナー「感じる事ができないほどの距離を一瞬で…」

クリスタ「ど、どうしよう！」アタフタ

アルミン「とりあえず、戻って報告しようか」

ミカサ「アルミンが言うなら」

クリスタ「そうだね…アルミンが言うなら」

ライナー「まあ、うん」

アルミン「あはは…いや、みんな何も言わないの!?!」

—————

———

]

シユン

ケニー「疲れた…」

エレン「あの一」

ケニー「あ？」

エレン「帰る事は…できませんか？」

ケニー「できねえよ。何回も言うけど、命令されてるんだよ」

エレン「そうか…」

↳翌日↳

ケニー「よしっ、とりあえず何かやれ」

エレン「何かって…あ、そういえば」

ケニー「あ？」

エレン「合体魔法ができるようになった」

ケニー「やるじゃねえか、よしっ、なら俺と戦え」

エレン「じゃあ、早速。『合体魔法』【炎の竜巻】《ファイヤートルネード》！」

ビュウウボワアア！

ケニー「まあまあだな…【水の盾】《ウォーターシールド》！」

ドゴーン！

エレン「マジかよ…（流石に強すぎるな…）」

ケニー「まあまあといった所かな。それ、魔力の消費量半端ないだろ」

エレン「うん…」

ケニー「なら、魔力の消費量少ない技を考えろ。それと、魔力を纏うのも忘れるな」

エレン「分かった」

なんだかんだ言つて

ケニー「っていう人はちゃんとやるんだな…」

にしても、技か…

とりあえず、これは置いといて

魔力を纏うようにするか

↳1週間後↳

エレン「おらアッ！」ボワアア！

エレン「いい感じかも…」

エレン「もう一度だ！」

エレン「【火拳】（ひけん）！」ボワアア！

ケニー「おっ、やっと二つ目かよ」

エレン「やっとって…魔力を纏うのに時間がかかったんだよ」

ケニー「できてなかったじゃねえか（こいつ…ペースが結構早いな…）」

エレン「うっ…」

ケニー「あと、合体は魔力消費量が多いから、ひとつの属性で、でかい技考えろ（普通は一人ひとつ何だが）」

エレン「分かった、じゃあさ、何かアイデア頂戴」

ケニー「なんでだよ…」

エレン「何すればいいか分からないんだよ」

ケニー「じゃあ、両手の手のひらを合わせろ」

エレン「分かった」パチッ

ケニー「手のひらに火の魔力を集めろ」

エレン「分かった」ボオオ

ケニー「それを放て」

エレン「とうっ」ボワッ

ケニー「威力がしょぼいな…」

エレン「だって…」

ケニー「まあいい、名付けて【豪炎球】（ごうえんきゆう）」

エレン「…ネーミングセンスが…イイ！」

ケニー「そ、そうか（チョロい）」

エレン「よしっ、頑張ってくる！」

ケニー「…あ…（食料無くなってきたから、買い物行くの忘れてた）」

エレン「手のひらを合わせて…」パチツ

エレン「魔力を集中させる」ボオオ

エレン「そして一気に放つ！」ボワアア！

エレン「いけえっ！【豪炎球】！」ボワアア！

ドツカーン

エレン「まだ威力が低いけどかっけえ！（今の所名前だけが）」キラ  
キラ

エレン「よしっ、順調」

まず、魔力消費量の少ない技

【風切り】（かざぎり）      【火拳】

魔力消費量がそこそこ多い技

【豪炎球】

合体魔法

【炎の竜巻】《ファイヤートルネード》

【雷嵐】《サンダーストーム》

いい感じだ！

ケニー「おい」

エレン「ん？」

ケニー「買い物に付き合え」



ケニー「水の国だ」

エレン「近いの風の国でしょ」

ケニー「うっせ、魚が食いたいんじや」

デテケ！ ソウダ！

エレン「ん？何だあれ」

ケニー「ほっとけ」

エレン「ちよつとトイレ行ってくる」タツタツタツ

ケニー「はあ、あいつバレバレな嘘つきやがって」

エレン「ハアハア…」タツタツタツ

町の人「出てけ！」

町のみんな「そうだ！」

エレン「おいてめえら、何してんだよ！」

町の人「あ？こいつが悪いんだよ」ユビサシ

少女「…」ボロボロ

エレン「てめえら、ふざけやがって」ボワアア！

町の人「何だよお前もそいつの味方するのかよ」

「何だこの集団は」

みんな「！魔法防衛団！」

エレン「チツ…何だ魔法防衛団か…」ボソツ

魔法防衛団「で、これは何だ？」

町の人「この女が魔力をコントロールできなくて、町を半壊させた

んですよ」ユビサシ

少女「…」

魔法防衛団「あ？お前かよ…今故郷に6年ぶりに帰って来たら」

魔法防衛団「少し壊れてるなど思ったらお前のせいだよ！」  
ビュウウ↑風の音

エレン「やめろ！」

エレン「それでも、魔法防衛団かよっ！」

魔法防衛団「何だガキがナイト様気取りか？」ヘラヘラ

エレン「雑魚は口だけかよ」

魔法防衛団「てめえ！」ビュウウ

エレン「『合体魔法』【炎の竜巻】《ファイヤートルネード》！」

ドツカーン！

魔法防衛団「かハツ…」

エレン「ふうー」

町の人「」

エレン「おいてめえら」ギロツ

みんな「！」

エレン「次はお前だぞ」ギロツ

みんな「！」

タツタツタツ↑町の人が逃げて行く音

エレン「大丈夫か？」

少女「あ、うん」

エレン「とりあえず、ここ離れようぜ」ギユツ

少女「あ…」タツタツタツ

エレン「こんぐらいなら大丈夫だろ」

エレン「あ、そういえば名前聞いてなかったな」

少女「えっと…フリーダ…」

エレン「そうか、じゃあフリーダ。一体何があった？」

フリーダ「それは…」ユビサシ

エレン「ん？」クルツ

家 ボロボロ

フリーダ「今は直ってきたけど、あんな感じにこの町を半壊させちゃったの…」

エレン「マジか!？」

フリーダ「うん…私ね、水の王の子どもでね」

エレン「!?今日はよく驚かされるな、(心臓に悪い)」ハハッ

フリーダ「兄と姉がいるんだけど、私は魔力がコントロールできなくて、兄と姉に恥さらしだなんて言われて…」

エレン「(ん?・恥さらし?…:どっかで聞いたような…)」

フリーダ「それが悔しくて、魔力をコントロールしようと頑張ってたら暴走しちゃって」

エレン「で、町を半壊と…」

フリーダ「うん…」

エレン「そんな落ち込むなって…」

フリーダ「でも…」

エレン「少し…俺の話聞いてくれ」

エレン「今は訳あって離れてるんだけど、俺、魔法学園に通ってるんだ。その同期でさ、偽名だけど、クリスタっていうんだ」

エレン「そいつさ、親にいらぬ子って言われて、しかも、そいつ結構偉い所のお家なのかな？殺すと悪い噂が出るからって言ってる前を変えて過ごすなら殺さないって言われたんだってよ」

エレン「でさ、必要とされるためにいい子ぶったんだ。でも、そいつは今話している事から分かる通り、全部俺に教えてくれたんだ」

エレン「そいつ話してる時、嫌われるかもって思ってたらしくて。相当辛い思いしたんだろうなって思った」

エレン「何が言いたいかというと、お前もそいつみたいになれとは言わない。少しでも、変わって見たらどうだ？」

フリーダ「変わる？」

エレン「ああ、魔力がコントロールできなくて、落ち込んで何も

ならないだろ」

エレン「だからさ、前向いて、次の事を必死に考えろ」

フリーダ「…少し…頑張ってみる」

エレン「よしっ」ナゲナゲ

フリーダ「うう／＼／」

フリーダ「あ、ひとつ聞いていい?」

エレン「ん?何だ?」

フリーダ「そのクリスタって子の本当の名前は?」

エレン「あんまり、言ったらダメって言われてるんだけど。ヒストリア・レイスっていうんだ」

フリーダ「!そうなんだ…」

私もフリーダ・レイスって言うんだ」

エレン「マジかよっ!？」

フリーダ「うん…」

エレン「そうなのか…」

エレン「そうだ、フリーダ」

フリーダ「ん？」

エレン「お前もよかったら、魔法学園こいよ」

フリーダ「いいのかな…」

エレン「大丈夫だろ、俺の仲間によろしく伝えとくぜ。」

フリーダ「ありがとう…えっと…「エレンだ」ごめん」

エレン「ごめんな、名前も言わずに勝手に喋って、勝手に撫でて」

フリーダ「うん、大丈夫。だって私に優しくしてくれる人なんていなかったもん。だから…とつても優しくかった」

エレン「そうか？」 ナデナデ

フリーダ「ふえええ!?!?!」

エレン「何だ今の声」ハハッ

フリーダ「うう／＼／＼」

エレン「そろそろ行かないと怒られそうだな」

フリーダ「え…」

エレン「あ、魔法学園には行くんだよな」

フリーダ「あつ、うん…」

エレン「そうか、ならよろしく伝えとくぜ」

フリーダ「あ、待って！」

エレン「ん？」

チュツ

エレン「なっ／＼／」カアアア

フリーダ「えへへっ／＼／＼今回はほっぺだけど、次は口だからね／  
／」

エレン「じゃ、じゃあな！／＼／」タッタッタッ

フリーダ「エレン…か…」

かっこよかったな…

――――

――

――

ケニー「遅いぞ、どんだけ長いんだ」

エレン「ごめん…ちよっと迷子になって」

ケニー「そうか…（いつも思うけど、その喋り方は何だ。友達じゃないんだぞ、一応師匠と弟子っていう関係なんだぞ…）」

ケニー「それじゃあ、帰るか」

エレン「分かった（つってというか、俺は何時になったら帰れるんだ？）」

シユン

エレン「つと…」

ケニー「そういえば、技は扱えるようになったか？」

エレン「まあまあかな。ただ、魔力消費のペースが…」

ケニー「チツ…仕方ねえ…魔力を増やす方法を教えてやる」

エレン「いいのか!？」キラキラ

ケニー「ただし、肉体強化が先だ」

エレン「えええー」ガーン

ケニー「当たり前だろ、魔力の増加に伴う体への負担が、増えるからな」

エレン「仕方ないか…」

ケニー「明日から始めるぞ」

エレン「じゃあ休んでくる」

エレン「しかし、最初はどうかと思ったけど、かなり強くなってきたな…」

エレン「今日はもう、休もう」

くあれから2ヶ月後く

エレン「うおおおお！」ダダダダ

ケニー「まっ、そろそろか…」

エレン「何が…ハアハアだよ…」

ケニー「魔力を増加させる方法」

エレン「マジか!？」

ケニー「ああ、明日からな（魔力を纏う件は…どこいった…）」

エレン「分かった」

くその夜く

「じゃあ、頼んだぞ」

「別に大丈夫だけど、あなたが誰かのために、魔力を増加させる試練をやってほしいなんて珍しいね」

「チツ…なんの事だ」

「まあ、いいけど」

「とりあえず、頼んだからな。」

【シルフ】

シルフ 「分かったわ」

〜翌日〜

エレン「ここで、魔力を増加できるのか？」

ケニー「ああ、だが正確には試練だけだな」

エレン「こんな森でやるのか…というか、試練って事なんで知ってるんだ？」

ケニー「一度だけ来たことがあって、風の精霊の試練を受けさせられた」

エレン「へえーそうなのか…」

エレン「にしても、木がでかすぎないか？40mぐらいないか？」

ケニー「精霊の近くの自然は活発なんだよ。チツ…能力使って木が倒れたら危ねえだろ」イライラ

エレン「(あつ、気にするのそこなんだ)」

―移動中―

ケニー「ここからだな」

エレン「分かった」

ケニー「一人で行けよな」

エレン「えっ…」

ケニー「もう二度とあんな試練は勘弁してほしい（特に風の精霊がウザイ）」

エレン「…分かったよ…」 スタスタ

ケニー「いや待てよ…あいつにはそこまで嫌な試練じゃないのか？

…  
考えるのをやめよう…」

ザツザツ↑森の中を歩く音

エレン「とは言ったものの、どうすれば…」

―割愛―

エレン 「ん？（森なのに、木が生えてない部分がある…）」

エレン 「行ってみよう…」

エレン 「何にもないな…」

「やあ、待ってたよ！君がエレン？」

エレン 「…はっ？」

「…うん！エレン君だね！」

エレン 「いや、この状況はなんだよ…謎の女の子がいるんだけど…」

「あつ、自己紹介がまだだったね私はね

風の精霊【シルフ】「っていうの！」

エレン「……えええええ!？」

シルフ「うわっ、びっくりした」

エレン「こ、これが!? 精霊!？」

シルフ「これがつて何よ!」プク

エレン「…」ジイー↑シルフをよくみつめる

シルフ「な、何よ／＼／＼そんなにジロジロ見て／＼／」

エレン「た、確かに…精霊って案外子どもっぽいかもしれないな…くないな。」やつぱり、ありえないな」

シルフ「な!?!このどことが精霊じゃないというのよ!」

エレン「全部（いや、だって、白のワンピースにポニーテールの金髪美少女のどことが精霊なんだよ!」

シルフ「全部漏れてる…」

エレン「あ…」

シルフ「一応これでも、700年近くは生きてるんだがら」

エレン「…（もう、一々反応しちやダメだな…ツツコミ切れない）」

シルフ「まあいいわ、早速だけど。魔力を増加したいんだって?」

エレン「うん」

シルフ「じやあ、今から精霊しか開けられない所開けるから、そこ  
の奥にいるのちよちよいつと倒してきてね」

エレン「あつ、うん…（もう何か色々疲れた）」

シルフ「あつ、倒したらそいつの血を飲んでね」

エレン「分かつt…えつ、血!？」

シルフ「い、いきなり何よ／＼／エツチつて…／＼／」

エレン「いやいや違うそれは誤解だ」

エレン「とにかくなんで血を飲むんだ？」

シルフ「それが魔力を上げてくれるのよ」

エレン「ええー」

シルフ「ええーじゃない。ほら、今から開けるから」

エレン「早いな」

シルフ「~~~~~」ブツブツ

エレン「?」(何言ってるんだ?よくわからん)

シルフ「~~~~~」よしっ

ピカッ ドーン

エレン「ま、マジかよ…」

扉 ドーン

シルフ「フツ…」ドヤア

エレン「わあ〜すごいすごい。シルフたんすごい(棒)」

シルフ「か、感情がこもってない…」シクシク

エレン「それじゃあ行ってくる」

シルフ「くれぐれも死なないようにね」

エレン「し、死ぬのかよ…」ゾクッ

ピカアーン！

シルフ「あつ、戦うのが【アイツ】って事言い忘れてた」テヘペロ

シルフ「まあ、何とかなるか…」

—————

———

]

エレン「いやいや、ここどこだよ…」

マグマ ポコポコ

エレン「少し暑いな…」 ↑火の能力者のため火耐性が強いです

エレン「(どこかの火山まで飛ばされたのか…?)」

グオオオオオオ!

エレン「!?なんだ今の…」

「グオオオオオオ!」ドス ドス

エレン「」

エレン「まてまて、あいつと戦うのか!」

「ん?何やら騒がしい小僧がきたな…」

※モン○ンのテオ・テスカ○ル的な感じす

エレン「ええええ!?喋れるの!」

「別にいいだろう、悪魔も喋れるんだから」

エレン「…あつ、それもそうだな…」

「小僧名前は？」

エレン「エレンといますー！」ビシッ

「そうか…わしもまだ名乗ってなかったな…」

「わしは火の竜

【イフリート】

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d